

# 京エネ会 会報

No.5

京都大学エネルギー科学研究科同窓会



## ご挨拶

日頃は京エネ会の活動に格段のご支援を頂き、誠に有難うございます。この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。エネルギー科学研究科は、平成21年で創設13周年となりました。平成21年3月には98名が修士課程を修了し、京都大学修士（エネルギー科学）は1383名となりました。また、京都大学博士（エネルギー科学）は、課程博士197名、論文博士54名に至りました。エネルギー科学研究科は、新しいエネルギー科学の学問の創製と深化、エネルギー・環境に対する専門的学識を持つ優秀な人材の養成、社会・産業界との連携・協力による社会貢献・科学技術の進展に邁進して参りました。ひとえに京エネ会会員の皆様方のご支援・ご尽力の賜物と、心より感謝申し上げます。

平成14年度より推進してまいりました21世紀COE「環境調和型エネルギーの研究教育拠点形成」プログラムは、大きな成果を上げて、平成18年度で終了しました。エネルギー科学研究科並びにエネルギー理工学研究所はこれを継承して、工学研究科原子核工学専攻及び原子炉実験所と合同で、グローバルCOEプログラム「地球温暖化時代のエネルギー科学 - CO<sub>2</sub>ゼロエミッションをめざして」を平成20年度から推進しています。2100年までに、化石燃料に依存しないCO<sub>2</sub>ゼロエミッションエネルギーシステムに到達するシナリオの実現に向けた技術の創出・政策提言を行う教育者・研究者・政策立案者を育成する国際的教育研究拠点形成を目的としています。

エネルギー科学研究科では、概算要求を行っていた工学部1号館並びに6号館の耐震改修が平成20年度補正予算で認められ、作業に入りました。平成22年3月には改修が完了する予定です。同じく補正予算で認められた宇治キャンパス本館の第3期耐震工事と連動して、宇治キャンパス本館にある当研究科分野を吉田キャンパスに移転する作業も同時に進めています。

また概算要求を行っていた、大学院・学部組織整備計画（学生定員の変更）が、平成21年度予算で認められました。平成21年度より研究科全体として学年当たり、修士課程が21名増加して130名に、博士後期課程が14名減少して35名になりました。

エネルギー科学研究科は平成18年度に、文部科学省の「国費外国人留学生（研究留学生）の優先配置を行う特別プログラム」に採択され、このプログラムによる外国人留学生を受け入れています。これと並行して、平成21年度において、京都大学が文部科学省の「国際化拠点整備事業（グローバル30）」に採択され、これにエネルギー社会・環境科学専攻、エネルギー基礎科学専攻、エネルギー変換科学専攻の3専攻が、国際エネルギー科学コースを共同で作成参画することになりました。平成22年10月から修士課程10名、平成24年度10月からそれに続く博士後期課程10名の外国人留学生を受け入れ、英語の講義、研究指導により学位を取得させるもので、鋭意準備作業を行っています。

京都大学が法人化されて、本年度で6年目を迎えます。第1期中期目標・中期計画の5年目である平成20年度においては、これ以前の平成16年度から平成19年度までの4年間の業務実績評価（いわゆる暫定評価）を受け、平成21年3月に、「中期目標の達成状況に関する評価結果」が公表されました。エネルギー科学研究科は、学内他部局と比較して、教育、研究ともに高い評価を得ました。皆様方のご尽力の賜物と考えています。

平成22年度より始まる第二期中期目標・中期計画の策定に関し、企画・評価担当理事の主導のもと、案文作成の作業が精力的に進められ、平成21年6月末に中期目標・中期計画素案を文部科学省に提出しました。今後、国立大学法人評価委員会にて素案を審議し、これを受けて平成22年1月に文部科学省に中期目標・中期計画原案を提出、さらに国立大学法人評価委員会にて原案を審議の後、3月に文部科学省から各法人に中期目標を提示する予定になっています。

研究科の体質を強化するために、同窓会の果たす役割がますます重要になってきております。京エネ会の皆様方のこれまでのご支援に深く感謝申し上げますとともに、各方面でのますますのご活躍を祈念いたします。今後ともエネルギー科学研究科への更なるご支援を賜りますことを、心よりお願い申し上げます。



京エネ会 会長  
教授 八尾 健

## 新天地、室蘭にて

名誉教授 香山 晃

京大から室蘭工業大学に移動したのは京大の停年2週間前でした。本来の予定では本年の4月からは大学時代に開発した技術を基に設立した会社の事業に専念するつもりでしたが、思い通りに行かないのが人生であり、今回もまた火中の栗を拾うような立場で頑張ることになってしまいました。

私の経験から後輩諸君に学んでほしいことは「人生到る所に青山あり。」であり、人それぞれに真剣に生きていくことで面白いように人生が展開していくことです。

私の人生は数限りない失敗と少しの成功、そして余りある達成感と満足感です。常に前のみを見て進む姿勢というのは欠点でもあり、長所でもあるといえますが、私にとっては唯一の生き方で、今も体力と知力の激しい衰えを感じつつも、日々頑張っているところです。

私と京大とのかかわりは40年前に大学院の研究で京大熊取の原子炉実験所で世界最初の原子炉内H<sub>2</sub>eループ内での内部摩擦のその場実験を行ったことに始まります。今のような優れた冷凍機の無い時代であり、24時間体制で1週間連続の実験を続けたことを思い出します。深夜に炉外の液体窒素タンクへH<sub>2</sub>e液化機のための液体窒素を汲みに行った時の綺麗な星空が記憶に残っています。

大学卒業後、関西地区の鉄鋼会社の研究所、東大を

経て京大原子エネルギー研究所に移り、工学部原子力工学科に兼任になりました。その後は研究を中心とした生活を思い切り満喫しました、また、この間、優秀な学生たちと主として研究を通じて交わり、研鑽をつめたことは大きな喜びでした。



北の大地にある室蘭工業大学でも違った意味での自然と文化、そして美味しい料理・酒を楽しみつつ日々を送っています。

こちらでは将来のエネルギー・環境問題への対応を考え、いくつかの試みを立ち上げつつあります。そのひとつは「環境・エネルギーシステム材料研究開発機構(OASIS)」の設立でしたが、この中で、11月からは京大で立ち上げた「ADMIRE計画」と同様の先端研究施設共用促進事業「FEEMA計画」を立ち上げたり、学内に宇部から生産施設等を移設して会社の生産事業所を設立してロケットノズルやレーシングカーの部品、原子炉関連の部品の生産などを開始したり、色々の活動を開始しています。

新天地での活動には多くの優れた人材を必要としており、優秀な京エネ会の人材の参加を期待しています。

## 閑話

名誉教授 近藤 克己

平成21年3月エネルギー科学研究科を定年退職し今は、特別なこともせず悠々自適の生活を楽しんでいます。在職中何とか職責を務めさせていただいたことは、多くの方々からのご支援があったことと感謝しています。特に毎年新たに入学してくる学生諸君には日々の議論を通じて新鮮な気概を感じさせられ若さを保つ上でこの上ない刺激となりました。現在ではそのような刺激が薄れていくことが残念な次第であります。

多くの学生諸君はエネルギー科学研究科に入学する目的としてエネルギーに興味があったり、エネルギー関連の職につきたいとかエネルギーという言葉を一に挙げられますが、私がエネルギー科学研究科に移る前までは、エネルギーをキーワードとした意識はそれほど強くなかったため、エネルギー科学研究科の構成員として若干違和感を持っていました。エネルギー科学について考えたのは、エネルギー科学研究科に移ってからということになるかとも思われます。エネルギー科学とは何か、どのように体系化すればよいかを模索いたしましたが、今に至るまで明確なイメージを持つことができません。エネルギー科学研究科が、たとえば工学研究科、理学研究科とどのように違うのか、またその存在の意義は何かという点についてまだはっきりと説明できません。エネルギー科学研究科の皆様は、

エネルギー科学という学問分野の体系化、あるいはこうあるべきであるという具体的なイメージを作り上げて世に問うていただければと思います。

近年CO<sub>2</sub>排出量の削減、日本における緊迫したエネルギー事情など種々の課題に直面しています。エネルギー科学研究科の皆様、修了生が果たす責任の重さが問われていると思われまます。また大きな期待があると思われまます。皆様の一層の発展をお祈りいたします。

なお顔写真の代わりに早春の梅林のスケッチを付けさせていただきます。



定年退職教授寄稿文

## 乾坤一擲

名誉教授 牧野 圭祐

この3月、12年間勤務したエネルギー理工学研究所を定年退職しました。現在は副理事・産官学連携本部本部長として、知的財産化あるいは産業界との共同研究を推進することによって本学の優れた研究結果を社会へ還元する、いわゆる研究・教育に次ぐ大学第三の責務を果たすための仕事をしております。急速に生産拠点が海外に流出し始めているさ中であり、国内の産業空洞化を如何にして食い止めるかという国家的問題に大学が如何に貢献できるか、が昨今の大きな課題であると自覚しております。

私は工学部の今はなき燃料化学科の出身で、福井謙一先生の研究室で研究者としての薫陶を受けましたが、当時は学園紛争の時代でしたので、なかなか複雑な師弟関係を経験しました。修士を出ると同時に、迷惑をおかけした学び舎をあとに、社会へ出ました。

福井研は、説明の要もないと思いますが、量子化学発祥の地であり多くの優秀な量子化学者が誕生した地であります。大学を去るとき、先生は「量子化学はいいからバイオをやりなさい。」といわれました。「量子化学は無理よ」なのか、当時全く新しい分野であったバイオに「挑戦するのは君たちをおいてほかにはないよ」とおっしゃったのかは今も謎ですが、先生のお言葉に忠実に従ってきました。理論化学からバイオまで、

物理化学等の深い深い谷を超えて何とか本懐を遂げたと思っております。

エネルギー理工学研究所での研究分野は生体エネルギー研究分野で、生物の持つ機能を利用してエネルギー生産あるいは環境保全に役立つ基礎科学を確立することを目的としました。研究テーマの幾つかですが、(1) バイオインフォマティクスを駆使した、木質バイオマスのエタノール化を目指した組換え酵母の作出、(2) オキサニン生成を基盤とした、生理活性物質一酸化窒素の生体毒としての作用機序解明、(3) 酸素由来フリーラジカルの生理作用機序解明とその新規プテリン誘導体による分子制御、などなどです。大学における研究で最も重要なことを偉そうに述べるとしたら、「いかに純粋科学において基本現象をとらえるかが重要であり、応用研究においても、純粋科学によって見出された基本現象に基づき、それから応用の基本原理を見出すことであり、応用そのものを目的とはしない」ではないかと思えます。

若い諸君の健闘を祈ります。



定年退職教授寄稿文

## エネルギーの世紀とSEE Forum

名誉教授 吉川 暹

オバマは就任演説で、再生可能エネルギーへのエネルギー体系の転換の必要性を訴え、環境エネルギー戦略によって米国の再生を図ろうとする「グリーン・ニューディール」は、今や世界的潮流となった。それに引き替え我が国は概ね新エネに懐疑的で、小規模・分散型の再生可能エネルギーは、効率的な大規模発電には到底かなわず、徒に消費者に負担を強いるだけというのが、主たる論点である。

しかし、避けられない化石燃料枯渇、現実味を帯びる地球規模気候変動、起こりうる自動車文明の終焉など、「変化」は、むしろ世界が文明史的な転換点に差し掛かっていることを示す兆であり、消費への欲望を刺激し続ける経済が、もはや成立し得ないことを示す。

ここに於いて、如何に素早くエネルギーシステムのパラダイムシフトを図るかが喫緊の課題であり、集積したイノベーションと、明確な哲学と、強力な政治力が求められる。オバマは昨12月には早々とノーベル物理学者のスティーブン・チューをDOE長官に指名し、そのRE政策を準備してきたし、ドイツのワイゼッカーは20年も前に、21世紀末をにらんだREを中心とするエネルギー政策を提唱し、これが欧州の基本スタンスとなっている。引きかえ、我が国ではリーダーの顔が見えず、取り組みも後ろ向きである。

京都大学はエネルギー分野における最多の研究者を擁し、最大のイノベーション拠点と目されている。私も参画させて頂いた、21世紀COEでは、「光合成型エ

ネルギーシステムの樹立」を掲げ、石原慶一教授を中心に、「2030年にCO<sub>2</sub>排出の50%削減」を可能とする需給シナリオをまとめた。また「SEE Forum」をスタートさせ、AUN21大学とともにAsian Academic Networkを構築し、各国に根ざした新エネ・省エネ・減エネ推進による、「New Energy Initiative」の実現を目指している。

CO<sub>2</sub> 25%削減をひっさげて登場した鳩山政権は当にその基軸を政府として掲げる内閣であり、その目標は八尾健教授をリーダーとするGCOEの課題でもある。奇しくも、鳩山首相の主唱する東アジア共同体はSEE Forumと同じASEAN+3という枠組みで進んでおり、今年はその延長上に、NECSEの発足が予定され、当にエネルギー分野における東アジア連携の新しい枠組みが動き出そうとしている。

その核となっているのが京都大学であり、車の両輪としてのエネ研・エネ科の強力なタッグが、いよいよ重要になりつつある。



註：SEE Forum (Sustainable Energy and Environment Forum), AUN (ASEAN University Network), NECSE (New Energy Consortium for Sustainable Environment)



## エネルギー科学研究科 国際エネルギー科学コース開設

エネルギー科学研究科国際交流委員長 教授 石原 慶一

文部科学省が平成21年度から開始する「国際化拠点整備事業(グローバル30)」の拠点大学の一つとして京都大学が採択され、その事業の一環としてエネルギー科学研究科の中に国際エネルギー科学コースを開設した。グローバル30の目的は、各大学の機能に応じた質の高い教育の提供と、海外の学生が日本に留学しやすい環境を提供する取組のうち、英語による授業等の実施体制の構築や、留学生受け入れに関する体制の整備、戦略的な国際連携の推進等、日本を代表する国際化拠点の形成の取組を支援することにより、留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材を養成することを目的としている。京都大学では、工学部に地球工学科国際コース、大学院にエネルギー科学研究科を含む8研究科11コースを開設する。また、これらのコースをまとめてK. U. PROFILE (Kyoto University Programs for Future International Leaders)と呼んでいる。さらに本事業で、全国の共同利用として本学と交流協定のあるベトナム国家大学ハノイ校に「京都大学ハノイ事務所」を開設する。

詳細は、<http://www.opir.kyoto-u.ac.jp/kuprofile/profile/>

エネルギー科学研究科では、エネルギー社会・環境科学専攻、エネルギー基礎科学専攻、エネルギー変換科学専攻の3専攻でこのコースを運用し、2010年10月から修士学生を2012年10月から博士学生を毎年約10名受け入れる。博士課程については、現在国際コー

スを開設しており、カリキュラムなどに大きな変更はないが、修士課程においては英語だけで卒業できるコースのため新たな仕組みが必要である。特に講義科目については、英語での提供が必要であり、そのために特定教員を新たに配置する予定である。その概略を以下に紹介する。



### 国際エネルギー科学コース(修士課程)

**入試方法:** 国外で大学を卒業した学生を対象として、提出書類による予備選考をまず行い、本人の希望から配属分野を割り当てるなど入学後の学習・研究に双方が対応できるかどうかを審査した後、各専攻で面接を含めて本選考をおこなう。

**入学時期:** 2010年10月入学

**履修科目:** 英語のみで修了に必要な30単位を修得することが可能

**募集定員:** 10名(3専攻合わせて)

**詳細:** <http://www.energy.kyoto-u.ac.jp/doctoral/>



## 大学で学んだこと

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター  
大学院基礎工学研究科

伊藤 京子 (2004年3月博士修了)

2004年3月にエネルギー社会・環境科学専攻博士課程(エネルギー情報学分野、旧吉川榮和研究室)を修了し、同年4月に大阪大学大学院基礎工学研究科西田研究室に助手として着任しました。着任先はヒューマンインタフェースの研究室で、学生実験や研究指導などを担当しました。2005年4月に学内に新しくできた「コミュニケーションデザイン・センター」への派遣教員となり、居室は基礎工のままでしたが、新しい組織の立ち上げに関わることができました。

コミュニケーションデザイン・センターは、人文社会系の教員やアート等の実務家を含む、教職員合わせて30名程度、学生は属さない組織です。全学大学院生に向けたコミュニケーション教育を主要なミッシ

ョンとした、全国的にも新しい組織でした。開設当初、完全に「理系」と呼ばれる経歴をもつ教員は、私1人でした。これまでにほとんど関わりのなかった、人文社会系やアートの人々と、身近に接する機会が毎日のように訪れました。

大学院時代、社環には様々な専門の研究室があり、講義や修士課程の発表会では、普段なじみのなかった内容に触れる機会となっていました。何年も所属するうちに、なんとなく慣れたような気になっていたものでした。この時も、さらになじ



みのなさではパワーアップして、「臨床哲学」、「哲学カフェ」、「科学技術コミュニケーション」、「臨床コミュニケーション」、「パフォーミングアーツ」、「演劇ワークショップ」、「ランドスケープデザイン」、「減災」などの、それが何を意味しているのかさえわからない言葉を、わからないままに毎日のように聞くことになりました。もちろん、今でもわからないことの方が多い気がしますが、それぞれの取り組みの一端に触れる機会を経て、おぼろげながらにどのようなことがなされているのか、知ることができた気はしています。

大学の重要な特徴の1つは多様性である、と、先日、

ある先生より教えていただきました。限定しない、よくわからない人がいる、1つの方法だけにしぼらない、が重要である、と。それがあつことすら知らなかった何かが、大学の中にあることをこの5年間で知りました。そして、大きく異なる人とコミュニケーションをとる困難さを感じることができました。この困難なコミュニケーションが何につながっていくのか、わからない部分もありますが、人と人とが異なること、人と人との異なる部分を、知った上で進んでいくことはとても重要だと思います。そして、それらを自分の仕事の中で活かすことのできるよう、進めていきたいと考えています。

同窓生の寄稿文(エネルギー基礎科学専攻)

特許から見た  
エネルギー技術の動向

三菱重工業株式会社  
原動機事業本部 高砂製作所

久保田 哲郎 (2004年3月博士修了)

エネ科関係者の皆様、こんにちは。私は2004年にエネルギー基礎科学専攻修士課程を修了後、三菱重工業(株)に入社して以来発電用ガスタービンの設計に携わってまいりました。今年度からは特許を扱う部門に異動し、主にガスタービンの特許について、技術と法律のあいだで右往左往する日々です。

さて、このたび会報に寄稿させていただくにあたりまして、皆様が普段見ておられるのとは少し異なった、「特許」という視点からのエネルギー技術の動向についてご紹介したいと思います。特許は実用化手前の技術について出願されることが多いため、大学の研究動向や一般的な報道とはまた違った観点で技術動向を眺めることができます。以下に示しますURLは、米国法律事務所 Heslin Rothenberg Farley & Mesiti による米国特許調査で、特にエネルギー技術特許の動向を分析したものです。

[http://cepgi.typepad.com/heslin\\_rothenberg\\_farley/](http://cepgi.typepad.com/heslin_rothenberg_farley/)  
Web上では各分野の特許件数推移や地域別データなども公開されていますが、ここでは例として企業別の特許件数ランキングに注目してみたいと思います。(表参照)

本表を見てまず目につくのは、ランキング上位に自動車メーカーが多いことです。これら自動車メーカーは主に燃料電池開発に集中していることが読み取れますが、その中でトヨタ社はハイブリッド自動車についてもかなり力を注いでいることが分かります。また自動車メーカー以外では、パナソニック社が燃料電池分野について精力的な開発を行っていることが分かります。一方で、風力発電分野ではGE社(米・総合重電)、Enercon社(独・風力発電機)が複数の特許を取得し

ています。風力発電は昔からある「枯れた」技術分野と思われるがちですが、実際には更なる開発競争が行われているフィールドであることが読み取れます。

先日、政府の温室効果ガス排出削減目標が大幅に見直されました。このような時流の中で、エネ科関係者の皆様の役割はますます重要になっているものと思われます。右肩上がりのエネルギー関連特許のグラフを眺めるにつけ、各分野における皆様方のさらなる御活躍を願って止みません。



米国特許取得数の企業別ランキング

(GEPCI 本文より抜粋、2009年度2Q)

順位	企業名	特許取得件数			Total
		燃料電池	風力	ハイブリッド自動車等	
1	ホンダ	14		3	17
2	GM	12		3	15
3	トヨタ	7		5	12
4	GE	2	9		11
5	日産	9			9
6	パナソニック	5			5
6	フォード	5			5
8	ダイムラー	4			4
8	Enercon		4		4

## 京都大学を卒業して

自然科学研究機構分子科学研究所  
極端紫外光研究施設 電子ビーム制御研究部門 助教

全 炳俊 (2009年5月博士取得)

エネルギー変換科学専攻博士課程(高品位エネルギー変換研究分野)を2009年4月に指導終了認定退学し、愛知県岡崎市にある分子科学研究所極端紫外光研究施設の助教に着任しました。その後、同年5月に博士の学位を取得することができ、博士を取得して研究者になるという博士課程進学当初の目的は少し順序が前後しましたが、先生方の暖かいご指導により何とか達成することができました。

学生時代は京都大学中赤外自由電子レーザー装置の開発に関わり、博士課程最終年度に同装置で初のレーザー増幅・発振を達成することができました。この装置は電子加速器により生成された高品質な電子ビームを使ってレーザーを作る装置で、私は主に電子加速器の高度化に携わっていました。現在の就職先の分子科学研究所は聞いた感じでは電子加速器と関係なさそうに聞こえますが、加速器の世界では有名なUVSORと呼ばれる加速器を1台所有しています。この装置は高エネルギー電子ビームを曲げたときに生じるシンクロトロン放射光を利用する装置で、毎週、たくさんの利用者が訪れて様々な実験が行われています。また、日本における自由電子レーザー研究の草分け的な装置であり、現在も自由電子レーザーの研究が行われています。このように幸運にも学生時代の研究と同じ分野の仕事に就くこと

ができ、毎日楽しくも忙しい生活を送っています。

研究分野は大きく変わってはいないのですが、就職して大きく変化したのは仕事に対する責任でしょうか。学生時代に責任が無かった訳ではないのですが、就職してからは一層強く感じるようになりました。お給料を頂いているというのもありますが、もっと強いのは京都大学では自分たちの実験が主であり、分子科学研究所では利用者の実験が主であるということです。加速器が一日動かないと5~8組におよぶ利用者が一日実験不能になる訳で、自分の実験だけが問題となる状況とは大違いです。しかし、何せ約30年前(私とほぼ同じ歳!!)に作られた装置なので、私の着任後、およそ月に1回程度の頻度で装置トラブルが起きています。こういったトラブルにあう度に、装置に対する理解が進むのは良いのですが、利用者へのアナウンスや実験時間の確保など、色々大変であると共に責任の重さを痛感しています。



## 品質管理という仕事

JFEスチール株式会社  
東日本製鉄所(京浜地区) 熱延部 熱延技術室

伊吹 和也 (2008年3月修士修了)

2008年3月、エネルギー応用科学専攻、資源エネルギープロセス学分野を修了し、同年4月、JFEスチール(株)に入社しました。入社後、私は配属先として熱延工場を希望し、幸いにも希望が叶い、東日本製鉄所(京浜地区)の熱延工場に配属となり、1年目は現場研修を経て操業管理に従事しました。配属先に熱延工場を希望したのは、大学での研究との関係性があったことかもしれませんが、その最たる理由は非常に単純なもので、私は学生時代に製鉄所の工場見学に参加したことがあり、真っ赤に加熱した鋼片を数mmの鋼板まで圧延するという熱延工場のダイナミックな工程に惹かれていたことにあります。

入社2年目の現在は品質管理に従事しており、担当業務を通して上司や職場の先輩方からご指導いただきながら、日々、勉強させていただいています。さて、皆様は「品質管理」についてどのようなイメージをお持ちでしょうか。お恥ずかしいことですが、当初、私は品質管理というのは、製品の品質がお客様との契約に基づいたレベルに達していることを検査等で確認し、報告・記録すること、すなわち、一般には品質保証に分類される内容と混同していました。品質管理の仕事では、製品の検査を行い、品質記録を取り、お客様からの品質に関するクレームに対して原因調査し、改善

策を提案・実施するということを行っています。品質保証と明確に分類することは難しいのですが、品質保証が主にアウトプットされた結果の是非を検査・確認して製品の品質を保証するのが業務であるのに対し、品質管理では結果を作り込むためのプロセスそのものを管理するのが主な業務といえます。

製品の製造プロセスを管理するに当たり、品質だけを管理し、コストや納期を考慮しないということはありません。一般に、品質とコストの間には正の相関があると思われがちですが、品質が高いことは、コストが高いことの必要条件でも十分条件でもありません。品質を高め、不良率低減のためにはバラツキを小さくすることが重要です。私は現在の業務に従事してまだ日が浅いですが、品質・コスト改善のため、加熱炉内のヒートパターンの最適化や、圧延機のロール管理基準の見直し、板幅制御精度改善など、上司の指導の下、様々な業務を担当させていただき、いろいろと悩みながらもやりがいを持って日々を送っています。



## 京工ネ会 平成21年度役員

役職	氏名	勤務先など
会長	八尾 健	エネルギー科学研究科長
副会長	尾形 幸生	エネルギー理工学研究所長
//	神田 啓治	名誉教授・エネルギー政策研究所長
//	永里 善彦	旭リサーチセンター
幹事長	前川 孝	エネルギー科学研究科教授
庶務	日比野光宏	エネルギー科学研究科准教授
//	今谷 勝次	エネルギー科学研究科准教授
//	藤本 仁	エネルギー科学研究科准教授
会計	奥村 英之	エネルギー科学研究科准教授
//	宮藤 久士	エネルギー科学研究科助教
//	伊神 弘恵	核融合科学研究所助教
事業	下田 宏	エネルギー科学研究科准教授
//	醍醐 市朗	東京大学特任講師
//	野平 俊之	エネルギー科学研究科准教授
//	鈴木 康浩	核融合科学研究所
//	増田 開	エネルギー理工学研究所准教授
//	河崎 澄	滋賀県立大学准教授
//	日下 英史	エネルギー科学研究科助教
//	袴田 昌高	産業技術総合研究所
監事	近藤 克己	名誉教授
//	吉川 榮和	名誉教授
事務局	打田 正樹	エネルギー科学研究科助教

## 京工ネ会 平成20年度事業報告

京工ネ会では、平成20年度は次のような活動を行いました。

1. 会報第4号発行（20年8月）
2. 会費の請求（会報配布と同時に案内の送付、および適宜）
3. 会員名簿発刊（21年3月）
4. 平成20年度のエネルギー科学研究科修了生への記念品（エコバッグ）贈呈、および修了祝賀会の開催（21年3月）
5. 正会員、学生会員および賛助会員の会費および徴収方法に関する附則第1条2の正会員の年会費事前一括方法を承認されたとおり実施しました。
6. 評議員の委嘱に関する附則に基づき評議員を委嘱しました。
7. 総会の開催（21年5月）
8. 以下については、継続的に進めています。
  - (1) 会員や在学生の懇親の場となる会合の企画、大学および研究科の諸行事との協力関係など、会の目的に合致する事業の可能性についての検討
  - (2) 本会ホームページの整備・拡充、また、ホームページ内にて会員への情報交流の場の提供。その一環として、本会ホームページ上から会報の閲覧できるようにします。21年12月現在、第4号のみの公開となっておりますが、第1号から第3号についても、ご執筆者に掲載許可を頂き次第、順次ホームページ上で公開できるよう準備を進めております。



## 京工ネ会 平成20年度 会計報告

### 会 計 報 告

(自平成20.4.1 至平成21.3.31)

収入の部		支出の部	
項 目	金 額 (円)	項 目	金 額 (円)
個人会費 (内訳)	1,271,000	印刷経費 会報 名簿	831,343
5年分一括払 (95名@10,000円)	950,000		
2年分払 (1名@6,000円)	6,000	修了生記念(エコバッグ)代	83,400
1年分払 (10名@3,000円)	30,000	諸経費 (内訳)	162,786
特別会費		総会・幹事会経費	48,375
修了生	270,000	アルバイト代	78,875
(54名@5,000円)		事務用品費	7,146
卒業生	5,000	運送・郵送料金	27,550
(1名@5,000円)		郵便振替から引落手数料	840
博士	10,000		
(1名@10,000円)			
名簿代金(26冊)	52,000	修了パーティー関連経費	221,315
名簿広告掲載料	30,000		
修了パーティー積立金(エネ科より)	227,232		
利息	302		
当該年度実収入合計	1,580,534	当該年度実支出合計	1,298,844
前年度繰越金	1,956,420	次年度繰越金	2,238,110
合 計	3,536,954	合 計	3,536,954

#### 会計監査報告

平成21年5月11日、厳正に会計監査を実施した結果、適切に経理が行われていると認める。

監事 神田 啓治  
監事 吉川 榮和

#### 【京工ネ会の会費納入案内】

##### 会 費

年会費 3,000円

10,000円で5年間分一括払い

##### ゆうちょ銀行

口座番号 00950-5-246160

口座名称：京工ネ会

##### みずほ銀行出町支店

普通口座

2358544 京工ネ会

京工ネ会 会報 発行：

京工ネ会会報編集委員会

事務局：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院エネルギー科学研究科内

##### 京工ネ会

FAX： 075-753-4745

E-mail kyoene@mbox.kyoto-inet.or.jp

Web： <http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoene/>

